

京都文教大学臨床物語学研究センター主催 2021年度・2022年度「物語と音楽」実施報告

堀内詩子・平尾和之

コロナ禍において、人と人との関係は物理的にも心理的にも距離をとることを否応なく求められ、それに伴い、表現活動も制限されてきた。オンラインのやり取りには慣れてきたものの、情報のやり取りに終始され、「立体」ではなくどこか「面」の側面が強調されていたことは否めないだろう。そんな中、京都文教大学臨床物語学研究センターでは、人々の内面を支えていく物語の力を大切に、物語を皆で共有しようという「コロナとともに*心を支える物語プロジェクト」を発信。物語を身体で感じる機会をもち、音楽と物語について再考しようと、「物語と音楽」を企画した。2021年には学生や教職員を対象にオペラ「ヘンゼルとグレーテル」を、2022年にはこども教育学科の学生と幼児と一緒にオペレッタ「スイミー」を行った。上記、2件の報告を行う。

2021年「物語と音楽—オペラが魅せる世界—」

1. 開催概要

- 1) 日時：2021年10月13日(水) 13:00～14:30
- 2) 場所：同唱館
- 3) 演目：「ヘンゼルとグレーテル」
Humperdinck 作曲
- 4) 出演者：黒田恵美(Sop)・小林久美子(Mez)・
島影聖人(Ten)・左成洋子(Pf)
堀内詩子(司会)

- 5) 参加者数：当日の参加者 310 名

観劇と YOUTUBE の配信を同時に行うハイフレックス型とし、会場では 230 名、オンラインライブ 80 名の参加があり、YOUTUBE での鑑賞はオンデマンドも含め約 700 回の視聴されている。(2023 年 5 月 1 日現在)。

2. 内容

1) 「誰も寝てはならぬ」

オペラの名曲として Puccini 作曲 オペラ「トゥーランドット」より「誰も寝てはならぬ」を島影聖人が披露。映画の BGM やフィギアスケートの演目でよく用いられる曲であり、多くの参加者が知っていたのか、テノールの歌声が響くと会場が一瞬にして静まりかえり、その圧倒的な迫力でオペラの世界に誘われた。



島影聖人氏 (Tenor)

2) ヘンゼルとグレーテル

Humperdinck 作曲「ヘンゼルとグレーテル」を、ヘンゼル（小林）、グレーテル（黒田）、魔女（鳥影）、ピアノ（左成）の4名での編成。コロナ禍の中での演奏ということもあり、演者同士が、一定の距離と保ちながら、向き合わないことや、跪かない、同じ小道具を持たないなど、感染症対策に留意をし、工夫をしながら舞台を構成した。

最初の二重唱「こうして踊るのよ」で、ヘンゼルとグレーテルの元気で楽しく、新しいことを求めるそんな二人の個性が光り、物語の世界が始まる。おつかいにいくヘンゼルとグレーテルは、森の中で迷ってしまったが、天使に守られながら眠りにつく。二人が眠りに誘われる「祈りの二重唱」が会場に響き、美しい音の世界が広がった。



オペラが演じられている時の様子①
二重唱 「こうして踊るのよ」
左：ヘンゼル（小林） 右：グレーテル（黒田）

二人が起きたら、目の前にお菓子の家が。そこは魔女の家で、「ホークス、ポークス魔法だぞ」と言いながら、ヘンゼルとグレーテルはとらえられてしまう。しかし、木の棒を腕だと見せて、やせ細り食べてもおいしくないことを訴えたり、かまどの使い方がわからないから教えてと言ったりと二人で知恵を絞り、最後はヘンゼルとグレーテルが魔女を倒し、捉えられていた他の子どもたちも解放する。「苦しい時は神様が助けてくださる」という最後のアリアを聞きながら、大きな拍手とともに幕を閉じた。



オペラが演じられている時の様子②
「ホークス、ポークス、魔法だぞ」
左から ピアノ（佐成） 魔法使い（鳥影）
ヘンゼル（小林） グレーテル（黒田）

3) アフターセッション

物語が閉じた後、出演者とフロアとアフタートークを行った。出演者からは、「コロナ禍はオペラ歌手にとって表現することが難しい状況ではあったが、表現するための土台である身体と向き合い、表現を深めていくことに丁寧に取り組める時間でもある」ことが共有された。また、フロアからは「表現と温度の違い」について、また「一般の演劇とオペラが違う点が演者にどのような影響を与えるのか」などの質問があり、温度感をどのように音の世界の中で感じるのか、また、舞台の温度をどのように変えていくのかというオペラ歌手としての工夫や技術について、また表現と「間」について共有された。

会場との交流を重ね物語を作っていく演者とそれを受け取っていくフロアが共に表現をすることについて語ることができるアフターセッションとなった。

3. アンケートより

アンケートを実施した結果、「音楽と物語のマッチが素晴らしい」「自分が子どもの頃に感じていたような物語にのめりこんでしまうような感覚を再体験することができた」「音楽によって物語の世界がこれだけ広がるのか」というよ



アフターセッション左から左成洋子氏 (Pf)・島影聖人氏 (Ten)・小林久美子氏 (Mez)・黒田恵美氏 (Sop)

うな、物語と音楽に関する感想や、「生の演奏がよかった」「身体を使って小さな機微を演じているすごさを感じた」というような、舞台の演奏を実際に生で観劇できたことがよかったという感想が散見された。また、「コロナ禍で観劇をする機会がなく、新鮮に感じた」「変容する日常にすっかり慣れつつあるこの頃だったが、いろんな感覚を取り戻せた」というようなコロナ禍で観劇を制限されている中で生の演奏を聞いたことに対する良さが、感想として数多く寄せられた。

当初予定していた、「表現を多面的に受け取る」という目的はおおむね達成されたといえる。また、大半が「満足した」という結果であり満足度の高さが伺えた。

2022年「物語と音楽—子どもの目で物語の世界に入る—」

1. 開催概要

- 1) 日時：2022年11月15日(火) 10:40～12:10
- 2) 場所：サロン・ド・パドマ
- 3) 演目：ミニ・オペレッタ「スイミー」

レオ・レオニー作 / 谷川俊太郎訳 / 薬師神武夫作曲

- 4) 参加協力：近隣保育園 園児約 38名
(4歳児・5歳児クラス)
学生約 63名
(こども教育学科幼児教育コース2回生)
- 5) 出演者：小林久美子(声楽) 三屋彩香(ピアノ)
- 6) 参加者：約 130名



2. 内容

夢中になって物語に入る子どもの姿を通して「子どもと物語を考える」というテーマを参加者や協力者と共に触れる機会を作ること、また近隣の保育園の園児との地域連携も意図して実施した。

1) 事前準備

①物語で使う小道具（スイミーや赤い魚、大きな魚）の作成。会場のレイアウト考案。②スイミー役や小さな赤い魚役、大きな魚の演技やセリフの準備。③会場の飾りつけ。④当日の背景に出す、PPTの作成。⑤当日の流れ、グループ分けや司会進行等の決定など、こども教育学部の有志が集まり、学生主体で企画や準備を行った。また、参加者全員で歌う箇所と一緒に練習をするとともに、壁面の海の絵を描くなどの準備を重ねて当日を迎えた。

2) 導入

園児たち（38名）は、徒歩で大学に来校。園児たちを大学生が迎えに行くところから、園児と大学生交流が始まった。園児にはひとりずつ、小さな赤い魚（模様なし）を準備し、大学生と一緒に赤い魚を自分の好きなように、模様を描いたり、目をつけたりして完成させた。目を3つ描く子や、模様をひとつひとつ丁寧に描こうとする子など、思い思いに魚を描いた。



園児と大学生と一緒に絵を描いている様子

描き終わった赤い魚は、壁面パネルの一部として、張り付け、スイミーの世界に彩りを添えた。そして、園児たちは、次第にこの場に慣れていき、はやく描き終わった子は、大学生と一緒にスイミーの舞台を探索しにいく子など、さまざまな園児と大学生の姿が見られた。



思い思いの場所に魚をはりつける園児

2) スイミーの物語

会場の準備が整い、いよいよ音楽劇「スイミー」が始まった。小林久美子氏の歌、三屋彩香のピアノが鳴り響き、途中、学生も歌を歌いながらスイミーの物語が進んでいく。スイミーと小さな赤い魚が平和に生きているところに、大きな魚が登場。怖い魚は会場を練り歩いたときには、子どもたちから「こわい」という声が



大きな魚が登場

聞こえ、大学生が大丈夫だよと声をかける場面があるなど、園児も大学生も物語を味わっている様子が伺えた。

仲間たちは大きな魚に食べられてしまい、独りぼっちになってしまう。しかし、岩かげに隠れている仲間を見つけた後、知恵を絞って、大きな魚に立ち向かうために、みんなで大きな魚になることを提案する。

子どもたちが作ったお魚の掲示物（3つのパネル）が合体して、大きなお魚よりもっと大きいお魚になったとき、子どもたちから、大きな歓声があがった。歌とともに、大きなお魚を追い出した時には、自然と拍手が起こり、物語は幕を閉じた。



パネルを合体させて、大きな魚にこれからスイミーが目となる（左：小林久美子氏）

3) みんなでエビカニクス

大きな魚に勝った後、園児と学生と一緒に「エビカニクス（ケロボンズ 作詞/作曲 増田裕子）」を踊り、会場を後にした。

4) シンポジウム

園児が退出したあと、大学生とフロアの方々と一緒に、ミニシンポジウムを行った。「音楽での物語は、人は何かになりながら、安全に遊ぶことができる」ということをテーマとして、出演者から実体験として物語の中で生きることについて話題提供。フロアからも、物語の中を生きることは、未来を夢見たりすることとつながるのではないかというコメントもあり、子どもと物語について、感想や意見の共有がおこなわれ、会を閉じた。

3. アンケートより

参加協力者（学生）のアンケートには、「海の世界を表現した環境でめだかの学校から始まり、自然とスイミーの物語の中に入ることができた」「みんなでセリフを言ったり、歌ったりしながら物語の世界に入っていった」等の感想が寄せられ、子どもと共に音楽と物語の世界に入っていった様子が伺えた。また参加者のアンケートからは、



フロアとのシンポジウムの様子

「子どもが物語に夢中になっている様子がとても良かった」「子どもがファンタジーの中で遊ぶこと、そして、夢を見ることとの関連について考えた」等の感想が寄せられ、子どもの世界をめぐる物語と音楽に触れる機会となったことが伺えた。